



原町小だより「はらまち」

川口市立原町小学校
全校児童数423名

「なかよく」「かしこく」「たくましく」

HPアドレス <https://haramachi-kawaguchi.edumap.jp/>

「尊重」について

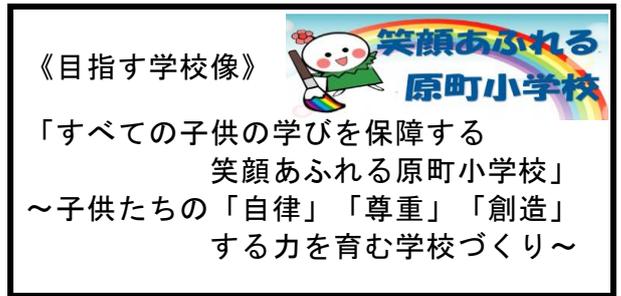
加田 明

紫陽花が色鮮やかな花を咲かせています。

コロナ感染症はいまだ予断を許さない状況にあります
が、子供たちが無事に学校生活を過ごせているのは保護
者や地域の皆さまのお陰と感謝いたしております。

さて、今回は「目指す学校像」にあります「尊重」に
ついてお話しします。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築を目指
して（答申）」では「子供たちに育むべき資質・能力」
を次のように述べています。



一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

学校ではこれまで「みんなで同じことを、同じように」を過度に要求したため「同調圧力」を感じる子供が増えていったと言われています。このことが結果としていじめや不登校などの問題や詰め込み教育をもたらしたとの指摘もあります。

多様化する社会の中で、子供の貧困や特別支援教育、外国につながる子供、不登校児童生徒といった課題について、子供の発達や学習を取り巻く個別の教育的ニーズを把握し、一人一人の可能性を伸ばしていくことの必要性が指摘されています。そして、学校の教育は「みんなが同じことをできるようにする」という「同質の集団」づくりから、「多様な他者」であることを理解し合って、子供たちが「それぞれの違い」を認め合っていく教育に重点が置かれるようになりました。

「自分の隣にいる人は、自分とちがってあたりまえ。自分を大切に思うのと同じように隣の人を大切にしないといけない。そういう社会を築いていかなければいけない。」ということ子供たちに理解させなければなりません。性別や国籍、経済的な差や障害の有無などにかかわらず、すべての友達を大切に思うこと。それは「思いやり」の気持ちから、一歩進んで、周りの友達を「尊重」する気持ちを培うことでもあります。その子の特性を知ったうえで、周りの子どもたちと安心してつながって、一緒に集団生活を送ることができるようにすることが大切です。

「インクルーシブ教育」という言葉がありますが、学校は「誰も排除しない」という意識を持ち「すべての子供を受け入れること」「子供たち一人一人が自分らしく安心して学べる環境をつくること」が必要です。「ふつう」ができない子供がいても、お互いを認め合って尊重することを、子供たち自身で学ぶ、その手助けをするのが大人の役割です。（「ふつう」という言葉自体、曖昧で不確かなものです。）学校は「すべての子供が自分らしく安心して学べる居場所」であり、どんな特性や個性があろうと「すべての子供の学習権を保障する」場所ではなくてはなりません。

「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（文部科学省 令和3年3月版）では次のように述べています。

特に小学校低学年においては、まず安心して学べる居場所である学級集団を確立し、教師が提示する課題を自らの学習課題として捉え、「分からないこと・できないこと」を「分かること・できること」にする過程が学習であることや、「分からないこと・できないこと」を他者に伝えたり助けを求めたりするなど、他の児童や教師との対話が学びを深めるために存在することといった事柄を理解することが必要です。

本校で研究している「学び合い」は安心して学べる居場所である学級環境の確立が必要であり、子供同士が互いに尊重し合い対等な関係のなかで違いを認め合う人間関係づくりが不可欠です。

他者を「尊重」する力、「人を大切にできる力」が多様性社会を生きて働くための基礎となるのです。

